

特集

マレーシア研修旅行報告

1/9(金)～16(金) 研修旅行を終えて…

〈研修スケジュール〉

- 1/10(土) ペナン ACS でプレゼン
- 1/11(日) ペナン観光
- 1/12(月) ペナン施設見学
- 1/13(火) サラワクへ移動
ロングハウスで交流
- 1/14(水) ムヒバセンター見学
- 1/15(木) シブへ移動

マレーシアのサラワク州で、知的障がい者の支援活動をされている中澤健さんとのご縁で実現した職員研修旅行（前号でお伝え済み）から、無事帰国致しました。

- ①地域コミュニティが育まれている暮らしを通して、真の豊かさとは何かを知る
- ②ペナン ACS、サラワク RCS の活動が地域の中で果たしている役割は何かを学ぶというテーマで研修に臨んだ、おかし屋ぱれっと所長長澤、えびす・ぱれっとホーム佐々木、事務局坂上の3名がご報告致します。

●プレゼン&交流会

今回の研修では、ぱれっとの活動を英語で紹介する大きな役目がありました。当日は障がいのある本人や家族、企業など50名が集まりました。発表では緊張で手が震えつつも、力を出し切れた誇りと清々しさで満たされると共に、母国語ではない“英語”で人に伝える難しさを実感しました。



【親亡き後の暮らしについて
関心を持つ親たち】

発表後の懇親会では、現地の親からマレーシアの福祉の実態と様々な思いを直接聞くことができ貴重な経験となりました。

●マレーシアを知る！！

ACS 総合施設長アイナさんの案内で、ペ

ナン散策。世界遺産ジョージタウンでは、中国式寺院、イスラム教のモスク、英国植民地時代の建物が混在する中、スカーフで頭を覆ったマレー系女性やサリーに身を包んだインド系女性が行き交い、「一体、どこの国にいるの？」と分からなくなる程。多民族国家を肌で感じられた瞬間でした。

●ACS の活動

高いビルが立ち並ぶ都市部から、緑が生い茂る自然豊かな場所にある ^{スティーピング}Stepping ^{ストーンワークセンター}Stone Work Centre (以下：SSWC) に見学へ。

現在メンバー22名、2000年にぱれっとへ研修に来ている所長のハスラーさんに加え、スタッフ3名が働いています。



【さをり織りの作業場を見学】

焼き菓子やパンの製造、さをり織りやバナナの繊維を使った紙すき、近隣の家庭から貰う廃油を使った石鹸など様々な商品を展開し、さらに親元を離れ、短期宿泊体験ができる家も隣接されていました。

作業場では熟練メンバーが、トレーナーとして、現場の中心になり、他のメンバーに教えていました。スタッフは困った時の相談役兼見守り役です。おかし屋ぱれっとでも先輩メンバーが後輩に教えることは

ありますが、ここではスタッフの代わりにトレーナーの役割を担っている点がとても新鮮に感じました。

マレーシアでは日本で言う特別支援学校を卒業後、自宅で過ごす人が多く、本人も家族も働くことに積極的ではない様子でした。その理由には、学校での進路支援や障がいのある人が働く為の社会の受け皿が十分でないことが挙げられます。更に、現在ある福祉作業所の多くは保護的、かつ訓練的な要素が強く、SSWCのように本人の希望や能力を生かした支援の場が少ないそうです。SSWCは今後のマレーシアのより良い障害者就労の基盤を作るべく先駆的な活動をしているのです。

SSWCは地域との繋がりも大変重視しています。障がいのある人たちを社会へと押し出すことで彼らへの理解を深め、地域住民との関係性を構築しながら、彼らを取り巻く社会問題を地域全体で受け止めて貰えるように努めています。

一方で地域にとってもSSWCの存在は大きなものです。この辺りは宗教の違いから融合が難しく保守的な土地柄です。障がいや宗教に関わらず様々な人を受け入れるSSWCの活動そのものが、地域住民の意識に変化を与え、自分たちのコミュニティのあり方をも見直すきっかけになっています。

そして、次に都市部に戻り First Step ^{ファースト ステップ} ^{インターベンション センター} Intervention Centre で、アメリカ人の言語療法士テリーさんから貴重なお話を伺いました。一軒家を利用したアットホームなこの場所では、現在0歳～4歳の子どもが通い、年齢別に生活訓練や遊びを取り入れた療育プログラムを提供しています。この日も3歳児の子どもたちが、カードや玩具を使いながら元気に学んでいました。

マレーシアでは「本人の身辺自立」より

も、比較的教育を重視する傾向にあるようですが、本人をはじめ親の意識を変え、社会全体の変革につながるよう、スタッフが一丸となり取り組む懸命さに、私たちも熱いものを感じました。

●ムヒバ ^{ムヒバ} ^{デイ} ^{センター} Day Centre の活動

飛行機を乗り継ぎ、ボルネオ島サラワク州シブへ。この辺りは、ペナンの都市部と違い熱帯雨林で覆われ、先住民のイバン族が住む伝統的な長屋風住居：ロングハウスが点在しています。

ペナンのACSでの活動が一段落し、ボルネオ島に移り住んだ中澤さん夫妻は、ロングハウスを回り、障がいのある人々の実態を調査してきました。その中で、交通の便が悪く、社会的インフラも整わない奥地である程、障がいのある人など社会的弱者と言われる人たちが益々不利な立場に置かれていることを実感したと言います。それを実感させた一人の少女との出会いが、^{ムヒバ} ^{デイ} ^{センター} Muhhibah Day Centre (以下:ムヒバ) 設立へと心を突き動かしました。



【休憩時間にも、笑顔が溢れ、自然とみんなが集まります】

マレー語で「調和」という意味の「ムヒバ」。様々な人が集い、交わり合う場になりたいという願いが込められています。山が切り開かれた後は、地域の人々や日本からのワークキャンパーたちが共に汗を流し、一つひとつ手を加えてきました。今では障がいのある人たちが集い、仲間が来て、共に笑い合える場所になり、地域住民にとっても、自分たちの手で作った自慢のムヒ

バになっています。

現在、ムヒバには子どもから成年まで21名のメンバーが通っており、スタッフは7名です。年上のメンバーが年下の面倒を見たり、介助を手伝ったりする姿が自然に見られました。日中活動は、曜日ごとに学習や作業、イバン族のダンス・楽器演奏などがあり、さをり織りや染物を使った商品の売上金は皆で分け合って、年2回、街に買い物に出かけるのを楽しみにしています。

庭先にある魚の養殖池、鶏小屋、野菜や果物を育てる畑は、彼らの栄養状態の改善を目的に作られました。

ムヒバは、学校へ行けずロングハウスでの生活だけだった子どもたちの新たな居場所となり、彼らの生活圏を広げ、様々な経験を通して、当たり前で暮らすことを意識づけることができたと考えます。また、通うことで、表情が明るくなり、友達のことを思いやり、自分の気持ちを表現できるようになり…と彼らに変化していく様子を見て、親自身や地域住民の障がいのある人への理解の深まりも見られています。

「センターに来ることができなければ、ボートにおもちゃを積んでこちらから出向こう」と更に奥地へと支援の目を向けた中澤さん夫妻は、新たに「Toy Boat」を始めました。ボートだけが唯一の移動手段の奥地に、中継地の村のNGOや病院スタッフと連携して、三日がかりで支援に行っています。「街から村へ、そして奥地へ」と活動を広げているのは、「福祉活動というのは、不利が重複した人たちに着目すること。やがて社会が着目するような実践モデルを作りたい」との中澤さん夫妻の思いから。

地域に根ざし、その場のニーズに合わせて必要なものを作っていく、自分たちだけではなく、地域の人々をどう巻き込み、継

続して活動をしていくのが大事であると強く感じずにはいられませんでした。

●ロングハウスでの暮らし

訪問先のロングハウスまでは、空港から唯一の信号を越え、ジャングルを流れる雄大なラジャン川沿いの道を40分程車で走ります。「インターナショナルロングハウス」と書かれた看板のとおり、イバン族だけでなく、中国系、マレー系、そして中澤さん夫妻が住み、国際色豊か。立派な門を抜けると、左側に長屋風の居住スペース、裏手にはラジャン川の支流が現れます。昨年電気が通るまでは洗濯をするなど、より生活に密着した川でした。



【マレーシア最大の川
ラジャン川の悠々たる流れ】

いよいよ長屋に足を踏み入れると、幅7m長さ130m程の廊下が横に続いており、その廊下を横切ると各家庭の玄関があります。玄関先で出迎えてくれたのは、現在16世帯120名程が住むこのコミュニティを束ねる家長夫妻。自家製の「トゥアック」というお米から作られたお酒を振る舞い、私たちの訪問を歓迎してくれました。

広々とした廊下は、各種イベントや会合は勿論、子どもたちを遊ばせながらお年寄りたちが手しごとをしていたり、夜は車座になってお酒片手に雑談に興じていたり、コミュニティスペースとして大いに使われています。(最終日の夜の送別会もここで盛大に行なわれました！)

どこかに足を運ばなくても、何かイベントを企画しなくても、自然に人が集まり、

会話が生まれ、交流できる…全てが自然の流れの中で営まれる空間はとても心地良いものでした。

3年前ぱれっとで研修したポーリンさんもこの住人。彼女が招いてくれたウェルカムパーティやBBQにも次から次へと総勢30名程が集まり、誰がどういう関係か分からないまま、笑顔溢れる賑やかで温かい時間が過ぎていきました。



【廊下でくつろぐ住人たち】

ロングハウスでは家長を筆頭に、会計、記録、福祉、レク係などで組織が構成され、「毎月の共同作業日に必ず各家庭から一名は参加すること」「負担金は各家庭の経済事情に寄るが、議決権は平等に与えられる」「多数決ではなく全会一致が必須」など、さまざまな自治の取り決めがあります。

ロングハウスで迎える初めての朝は、鶏の賑やかな鳴き声と共に始まりました。ペナンでのコーランに引き続き、ここでも目覚まし時計は不要なようです。鶏の他、ブタや魚を飼い、お米を育て、果樹も豊富で、半自給自足的な生活が可能です。ゴムや胡椒は貴重な現金収入にもなっているそう。自然を知り尽くし、知恵や工夫を凝らして力を合わせて何でも作ってしまう人達がたくさん居るのも頼もしい限りです。

コンビニもない、郵便配達もない、電話も無線LANもないここでの暮らし。電気が通り便利さを一つ手に入れたことで、従来とコミュニティの在り方が変わる懸念はあるものの、まだまだここには「分かち合

い・助け合いの精神」が健在でした。彼らの暮らしのように自然や人との「つながり」の中で生きるとは、安心感、感謝の気持ち、自分の存在意義、心の余裕、優しさが自然と生まれ、自分たちの手で、地域に根差した暮らしを作ること、確かな自信と誇りが持てる…そんな「心が満ち足りた状態」で常にいられるのではないのでしょうか。それが、研修テーマのひとつに挙げた「真の豊かさ」につながる気がします。改めて「便利さ」とは、人の手を煩わせないための手段で、簡単に「つながり」を断ち切ってしまうものであること、だからこそ、都会で活動する私たちにとって、ぱれっとの家いこつと（障がいのある人となない人が共に暮らす家）やたまり場ぱれっとのような存在が益々重要になってくるのではないかと実感した滞在でした。

●研修を終えて…

佐々木 “国は違うけれど、活動に関わる人々の気持ちは同じだ”ということを感じました。人と人との繋がりが次の繋がりを生み、その思いに共感し関わる人々が一つの目的に向かって試行錯誤しながら進むことの大切さに改めて気づきました。

長澤 今回の研修は現場を離れ、自分自身を見つめ直すよい機会となりました。そして今後、ぱれっとにどう活かせるのかが私の課題です。これから様々な壁にぶつかることがあった時、ここでの経験や学び、感じた事が私の力となってくれると思います。

坂上 中澤さんの講演会以来、念願だったロングハウスに行くことが叶いました。自然と人のぬくもり溢れる暮らしを通して、感じた真の豊かさ。全ての人たちが味わえるよう、都会で活動する私たちに何が出来るのか今後に期待が高まります。

(長澤美佳・佐々木志保・坂上玲子)